様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６２４４０４４

研究課題名（和文）石造物研究に基づく新たな中近世史の構築

研究課題名（英文）Medieval and early modern history by study for stone monuments

研究代表者
関根　達人（SEKINE, Tatsuhito）

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：００２４１５０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　30,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、墓石や記念碑などの中近世の石造物に関する考古学・文献史学・金石学・民俗学・自然科学の共同研究である。本研究では福井県内の三か所の港町、三国・敦賀・小浜で中近世の石造物の悉皆調査を行うとともに、北海道ならびに青森県から山口県に至る日本海沿岸の港町で近世海運関連の石造物調査を実施し、人・物・情報の交流や港町の盛衰の実態を明らかにした。本研究によりこれまであまり注目されることのなかった石造物を用いた歴史研究の有効性と可能性が確かめられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで日本の中世・近世の歴史研究は、専ら豊富に存在する古文書の研究に基づき進められてきた。一方中世や近世を対象とする考古学はこれまであまりにも陶磁器研究に偏りすぎていた。石造物を対象とする本研究は、石造物すなわち「石に刻まれた歴史」が、古文書すなわち「紙に書かれた歴史」や考古資料すなわち「大地に埋もれた歴史」とならぶ重要な歴史資料であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study is collaborative investigation of archeology, documents historical study, epigraphy, the natural science about stone monuments such as gravestones of the medieval ages and early modern . We performed complete survey of stone monuments built from medieval ages to early modern in three places of port towns, Mikuni, Tsuruga, Obama in Fukui pref. We investigated stone monuments in conjunction with the marine transportation in the early modern times in the port towns of the Sea of Japan coast to Yamaguchi from Aomori and Hokkaido. Interchange of persons, supplies, the information and the ups and downs of the port towns became clear by these investigations.The effectiveness and the possibility of the history study using stone monuments which there was not of attracting attention too much were checked until now by this study.

研究分野：考古学

キーワード：石造物　墓石　中近世史　海運

１．研究開始当初の背景

これまでわが国の中世・近世の歴史研究は、古文書を中心に考古資料や民俗資料などの非文字資料を重ね合わせる形で進められてきた。江戸時代には大名から庶民に至るまで多様な階層の人々が、石に自らの想いや願いを刻むことが流行し、墓石から狛犬まで様々な石造物が作られた。ところが我が国の石造物研究は美術史から出発したため、時代が新しく美術的評価の低い近世石造物は、これまでほとんど研究対象とならなかった。また、板碑などの中世石造物が、数少ない中世文書を補完する歴史資料として注目されてきたのに対し、古文書以上に膨大な近世石造物は、歴史資料としても未だ十分認知されていない。江戸後期には墓石が普及するとともに、各地で史蹟碑・名勝碑・功徳碑・孝養碑など様々な石造記念碑が造立されるようになった。江戸時代に育まれた石造物文化は、明治以降も今日に到るまで引き継がれており、江戸と現代を繋ぐ歴史の経糸の一つになっている。石造物は「石に刻まれた歴史」であり、古文書や浮世絵のような「紙に書かれた歴史」、遺跡や遺物といった「大地に埋もれた歴史」、歌舞伎や落語のような「人から人へと伝えられる歴史」とともに、江戸時代を知る上で重要な歴史資料といえる。

２．研究の目的

本研究は、これまで主として古文書を中心に、考古資料や民俗資料などの非文字資料を重ね合わせる形で進められてきた中近世史研究に対して、文字資料と非文字資料の両方の属性を併せ持った石造物から新たな歴史像を提供することを目的とする。本研究では、石造物（「石に刻まれた歴史」）を、古文書（「紙に書かれた歴史」）や考古資料（「大地に埋もれた歴史」）とならぶ重要な歴史資料と位置づけ、考古学・文献史学・金石学・民俗学・自然科学を総合し、具体的な事例研究を示すなかで、中近世史研究に新たな視点と方法を構築することを目的とし、以下の 4 つの目標を設定した。

①中近世石造物の編年と地域性に関する基礎的研究
②近世石造物の製作と流通に関する研究
③中世と近世への変化に関する研究
④近世の海運と港町の変遷・盛衰に関する研究

３．研究の方法

(1)日本海海運の北のターミナルである松前三湊と京･大坂を結ぶ北陸の湊町で中近世石造物の悉皆調査を計画し、以下の通り中近世墓標の調査と分析を行った。
平成 26 年度 福井県坂井市三国町 調査数 3380 基（9849 人分）
平成 27 年度 福井県敦賀市 調査数 1877 基（6265 人分）
平成 28・29 年度 福井県小浜市 調査数 11155 基（17656 人分）
(2)青森県から山口県に到る本州日本海沿岸の湊町において､近世の日本海海運に関連する石造物調査を進めるとともに､大坂石工･泉州石工を中心に近世石工データベースの構築を行った。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

①中近世石造物の編年と地域性に関する基礎的研究

越前三国・敦賀と若狭小浜の中近世墓標の悉皆調査に基づき、15 世紀から 19 世紀に至る墓標の型式変遷をとらえることができた。また墓標の地域性についてもこれら越前・若狭の調査とこれまで北海道と青森で行ってきた調査との比較により様相をつかむことができた。

ストゥーパ（仏塔）に起源をもつ墓標は元々五輪塔や宝篋印塔といった「塔形」であり、一人一基が原則であったが、15-16 世紀代に普及する過程で小型化するとともに、夫婦墓が出現する。17 世紀には夫婦墓に適した「碑形」のものが「塔形」を上回るようになり、18 世紀以降、家族墓の普及により、より多くの死者の戒名を刻むのに適した多面体が好まれるようになり、「方柱形」が急増する。

地域性に関しては、墓標が全国に普及した 18 世紀後半以降、北陸街道の要所であった越前木の芽峠を境として､それより東側では若狭以西との深い結びつきをもつ松前を除いて､「方柱形」が主体を占めるのに対して、畿内では「櫛形」が「方柱形」を上回る形で継続する。

②近世石造物の製作と流通に関する研究

越前の笏谷石・若狭の日引石・瀬戸内の花崗岩など、日本海沿岸の中近世墓標に使われた石材の産地を調べることで、石材が地産地消（16 世紀以前）→広域流通（17～18 世紀前半）→地産地消（18 世紀後半～）と変化したことが分かった。18 世紀後半に各地で地元の石材利用が活発化するのは、墓石の普及に伴って各地に石工が拡散・定着したことに起因する。

瀬戸内産花崗岩製石造物の日本海沿岸地域への流入は､西廻り航路確立直後の 1670 年代に始まる。最初に運ばれたのは、近世最大の石工集団である大坂石工の作品であった。大坂石工の作品が幕末まで北海道を含め広く分布するのに対して、泉州石工の作品は日本海沿岸域にはほとんどない。1700 年代からは尾道石工の作品､1760 年代からは赤間関石工の作品が数多く日本海沿岸域へ運ばれた。他に石見では、1750～1780 年代には芸州広島石工、1840～1860 年代には長州大浦（尾浦）石工の作品が確認された。石造物数からみて、北前船による瀬戸内産花崗岩製石造物の流通は 1840 年代にピークがあり、それ以降は下火となったと推測された。

③中世と近世への変化に関する研究
　中近世石造物調査事例が多い関東地方では、墓標の不連続性から中世社会と近世社会の「断絶」が指摘されてきた。北陸では近世墓標の調査事例がこれまでなかったが、今回の研究により、関東地方に比べて北陸では中世と近世の「連続性」が強いことが判明した。
④近世の海運と港町の変遷・盛衰に関する研究
　本研究では松前三湊（松前・箱館・江差）と越前・若狭の湊（三国・敦賀・小浜）の近世墓標数・墓標に刻まれた被供養者数の変遷や、墓標などの石造物に用いられた石材から、近世日本海海運と港町の変遷・盛衰について研究を行った。
　河村瑞賢により西廻り航路が開設された 1670 年代以降、日本海沿岸域に広く瀬戸内産の花崗岩を用いた石造物が搬入されたことが判明し、西廻り航路の開設が物流環境を大きく変えたことが確かめられた。
　松前三湊の墓標を調べた結果、幕藩体制の成立とともに早くから湊町としての地位を確立したのは、城下町松前だけであり、箱館と江差が湊町として賑わいだすのは 18 世紀以降であることが分かった。18 世紀以降、松前や箱館では人口が急激に増加したと考えられるのに対して、江差の人口増加率はさほど高くなかったと推定された。
　越前の三国・敦賀と若狭の小浜はいずれも中世から続く湊町で、15 世紀代から墓標の造立がみられる。墓標の増加からみて、人口が著しく増え始めた時期は、敦賀が 16 世紀後半、三国と小浜はそれよりやや遅れて 17 世紀前半からと考えられる。天正期頃から急激に増加したと考えられる敦賀の人口は 1770 年代がピークで、その後は幕末まで減少・停滞・減少と振るわなかったと推測される。18 世紀前半の小浜では墓標数・被供養者数とも順調に増加しているのに対して、三国と敦賀は減少・停滞傾向にある。これは寛文 12 年（1672）の西廻り航路の確立による物流の変化が関係している可能性があろう。西廻り航路の確立以前には、敦賀・三国・小浜をはじめとする越前・若狭の湊町は、越中以北から日本海を南下する船のターミナルの役割を担っていた。越前・若狭の湊町で陸揚げされた物資は、そこからは陸路や河川交通により畿内へと運ばれた。しかし西廻り航路の確立により、蝦夷地・奥羽方面から畿内へと船で運ばれる物資は、越前・若狭の湊町で陸揚げせずとも、関門海峡・瀬戸内海を経て、船に載せたまま大坂まで運ぶことが可能となった。これにより越前・若狭の湊町は日本海を南下する船のターミナルから一寄港地へと地位が低下した。しかし、越前の敦賀・三国と異なり、小浜は、古代より若狭・因幡から畿内へ運ぶ物資の陸揚げ地でもあった。また、敦賀と三国が西廻り航路の確立により大きな打撃を受けたのに対して、小浜はむしろ日本海を西に進む船の数が増えたことで寄港する船が多くなり、湊町としてますます繁栄したと考えられる。
　なお、三国・敦賀・小浜とも 1840 年代以降幕末に向い墓標数・被供養者数ともに減少していた。この時期、急に人々が墓標を建てなくなったとは考えにくいことから、これは母数である人口の減少と理解せざるを得ない。同じ現象は松前でも認められた。19 世紀の日本海海運は、北前船と呼ばれる荷主と船主が同一の買積船によって特徴づけられる。北前船に関しては分厚い研究の蓄積があり、その捉え方には差がみられるが、江戸時代よりもむしろ明治時代に入ってからより一層活動が活発化したという点では意見が一致している。しかし、本研究で明らかになったように、北前船の寄港地として知られる松前・三国・敦賀・小浜では幕末に人口減少が起きていた可能性が高いのである。安政の開国に伴う箱館・新潟の開港は、日本海交易にも多大な影響を及ぼしたと考えられる。幕末には、北前船の寄港地の中で箱館と新潟だけが突出した「勝ち組」となり、他の多くの湊町はこの二つの巨大な交易港に食われる形で衰に向かい始めたと解釈された。
(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト
　本研究は、近世石造物に関する初めての分離融合型の総合研究であり、石造物が近世史研究上も非常に重要な歴史資料である点が明確となった。同時代の世界を見回しても、近世に始まる日本の石造物文化は大変ユニークであり、近代以降に連続するという点でも大変注目される。近世石造物を対象とした本研究は、国内外を問わず日本文化研究に新たな分野を開拓したといえよう。
(3)今後の展望
　本研究では、石造物の中でも墓標と海運関連石造物を主な研究対象としたが、他にも各種の記念碑類や災害碑など近世石造物は多様性に富む。今後はいくつかの地域において、すべての種類の近世石造物の悉皆調査を行うことで、地域共同体の本質に迫る研究が期待される。また、今後、近現代を視野に入れ、石造物を通して近世と近現代のつながりを比較することで、日本の近代化のなかで何が引き継がれ、何が変わったかが明らかになるであろう。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 25 件）
①関根達人「日本海沿岸域における近世石造物の流通－石工銘資料に基づいて－」（『論集 葬送・墓・石塔』 狭川真一さん還暦記念会 533-542 頁 2019 年）査読なし
②関根達人「若狭小浜藩主酒井家の墓制－江戸と国元、本葬と分霊－」（『人文社会科学論叢』6 弘前大学人文社会科学部 17-45 頁 2019 年）査読なし
③羽賀祥二「尾張藩の「幕末文化」と地誌編纂」（『近代日本の地域と文化』 吉川弘文館 256-282

頁　2018 年）査読なし
④羽賀祥二「南朝への視線―王政復古の歴史認識―」（『近代日本の歴史認識』　吉川弘文館 279-306 頁　2018 年）査読なし
⑤狭川真一「慧日寺伝徳一廟五重石塔の再復元」（『元興寺文化財研究所研究報告』2017　73-80 頁　2018 年）査読なし
⑥関根達人「大安寺水沢伊達（留守）家墓所の墓標」（『大安寺水沢伊達（留守）家墓所調査報告書』　岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書 33　24-33 頁　2018 年）査読なし
⑦関根達人「津軽・下北の近世海運関連石造物」（『弘前大学國史研究』144　弘前大学國史研究会 79-91 頁 2018 年）査読あり
⑧狭川真一「兵庫城跡出土の転用石造物について」（『兵庫津遺跡 第 62 次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　209-212 頁　2017 年）査読なし
⑨狭川真一「正暦寺宝篋印塔実測記」（『元興寺文化財研究所研究報告』2016　53-64 頁　2017 年）査読なし
⑩岩淵令治「鳥取藩・鳥取藩士と江戸寺社」（『鳥取藩研究の最前線』　鳥取藩政資料研究会 161-210 頁　2017 年）査読なし
⑪石田肇「「木百年妻深井氏墓」碑と石工「中慶雲」について（下）」『史迹と美術』851、21-30 頁　2017 年）査読なし
⑫関根達人「近世石工の基礎的研究１－高野山奥の院と住吉大社－」（『人文社会科学論叢』3 弘前大学人文社会科学部 1-32 頁 2017 年）査読なし
⑬市村高男「古代・中世における日本海域の海運と港町」（『中世都市研究』19　5-24 頁　2016 年）査読なし
⑭先山徹「花崗岩類石材の岩相と産地同定」(『大坂城跡 7』　大阪府文化センター調査報告書 269　202-209 頁　2016 年）　査読なし
⑮先山徹「兵庫県南部六甲山地の花崗岩と災害文化」（『月刊地球』号外 66　海洋出版　30-39 頁　2016 年）査読なし
⑯狭川真一「転用石造物にみる宗教観」（『寺社と民衆』12 民衆宗教史研究会出版局　1-7 頁 2016 年）査読なし
⑰石田肇「「木百年妻深井氏墓」碑と石工「中慶雲」について（上）」（『史迹と美術』850　328-338 頁　2016 年）査読なし
⑱谷川章雄「近世の墓石に刻まれた地名―城下町松前の近世墓標調査から―」（『地名と風土』10　日本地名研究所　10-17 頁　2016 年）査読なし
⑲狭川真一「奈良の古式宝篋印塔実測記」（『元興寺文化財研究所研究報告』2014　27-34 頁 2015 年）査読なし
⑳市村高男「地域的統一権力の構想」『岩波講座日本歴史』9　岩波書店　103-138 頁　2015 年）査読なし
㉑市村高男「古代中世における自然大災害と社会の展開」（『日本史学のフロンティア』2　法政大学出版局　13-72 頁　2015 年）査読なし
㉒岩淵令治「文献史料から見た大名家墓所の確立」（『 近世大名墓の成立』 雄山閣　75-96 頁 2014 年）査読なし
㉓中井均「豊国廟と東照宮の成立」（『 近世大名墓の成立』 雄山閣　45-58 頁　2014 年）査読なし
㉔狭川真一「中世武士の墓の終焉と高野山大名墓の成立」(『 近世大名墓の成立』雄山閣　12-29 頁　2014 年）査読なし
㉕関根達人「地域における近世大名墓の成立 4 東北」（『 近世大名墓の成立』 雄山閣　163-178 頁　2014 年）査読なし

〔学会発表〕（計 2 件）
①関根達人「墓石研究の視点と方法」（第 10 回葬墓制からみた琉球史研究　2019 年）
②関根達人「「近世考古学研究への取り組み―北方史と近世考古学―」（日本考古学協会第 80 回総会公開セッション　2014 年）

〔図書〕（計 5 件）
①関根達人『墓石が語る江戸時代』（吉川弘文館歴史　総 256 頁　2018 年）
②市村高男・上野進・ 渋谷啓一・松本 和彦編『中世港町論の射程－港町の原像〈下〉』（岩田書院　総 324 頁　2016 年）
③関根達人『モノから見たアイヌ文化史』（吉川弘文館　総 194 頁　2016 年）
④羽賀祥二『濃尾震災記念堂－歴史を繋ぐひとびと－』　濃尾震災記念度保存機構　総 161 頁 2015 年）
⑤関根達人『中近世の蝦夷地と北方交易』（吉川弘文館　総 407 頁　2014 年）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：谷川　章雄
ローマ字氏名：(TANIGAWA　Akio)
所属研究機関名：早稲田大学
部局名：人間科学学術院
職名：教授
研究者番号（8 桁）：40163620

研究分担者氏名：狭川　真一
ローマ字氏名：(SAGAWA　Shinichi)
所属研究機関名：公益財団法人元興寺文化財研究所
部局名：研究部
職名：研究員
研究者番号（8 桁）：30321946

研究分担者氏名：中井　均
ローマ字氏名：(NAKAI　Hitoshi)
所属研究機関名：滋賀県立大学
部局名：人間文化学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：10621427

研究分担者氏名：市村　高男
ローマ字氏名：(ICHIMURA　Takao)
所属研究機関名：大阪産業大学
部局名：国際学部
職名：特任教授
研究者番号（8 桁）：80294817

研究分担者氏名：羽賀　祥二
ローマ字氏名：(HAGA　Shouji)
所属研究機関名：名古屋大学
部局名：人文学研究科
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：30127120

研究分担者氏名：岩淵　令治
ローマ字氏名：(IWABUCHI　Reiji)
所属研究機関名：学習院女子大学
部局名：国際文化交流学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：90300681

研究分担者氏名：先山　徹
ローマ字氏名：(SAKIYAMA　Tooru)
所属研究機関名：兵庫県立大学
部局名：地域資源マネジメント研究科
職名：客員教授
研究者番号（8桁）：20244692

研究分担者氏名：石田　肇
ローマ字氏名：(ISHIDA　Hajime)
所属研究機関名：群馬大学
部局名：その他部局等
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：80125822

(2)研究協力者
研究協力者氏名：朽木　量
ローマ字氏名：(KUTSUKI Ryo)

研究協力者氏名：石神　裕之
ローマ字氏名：(ISHIGAMI　Hiroyuki)

研究協力者氏名：関口　慶久
ローマ字氏名：(SEKIGUCHI Yoshihisa)

研究協力者氏名：澁谷　悠子
ローマ字氏名：(SHIBUYA Yuuko)

研究協力者氏名：田坂　里穂
ローマ字氏名：(TASAKA Riho)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。